

写真4 19世紀末に建設された労働者住宅の空家。外観はティール街並み。

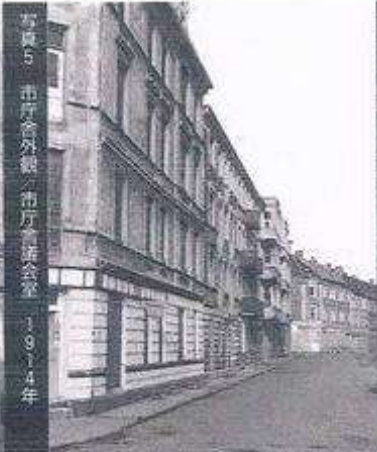


写真5 市庁舎外観。市庁舎。1914年。



写真8 旧市街地で最も古い中世のゲート建物。現在は空家だが、音楽学校や文化フォーラムのための建物にすることが予定されている。



写真6 ネオゴシックの小学校。校庭と校舎。1907年。



写真7 ユーゲント・シュティール様式の市民住宅の街並み。



た人口は急激に減少し、1998年には2万3千人に下落した。今もなお産業基盤の見直しが図れないまま失業率は16%と高く、緩慢にはあるが人口は流出し続けている。

■市街の形成

ウィッテンベルゲ駅は旧市街地から2キロ近くも離れた位置に建設されたため、街の中心としての機能は旧市街地から失われ、次第にこれらを結ぶ中央通り（バーンシュトラッセ通り）沿いへと移行し、沿道には多くの商業建築やオフィスが建ち並んでいった。19世紀末からはこの中央通り（地図2）を挟む形で、拡大する産業に伴って次々に建物が建設されていく。通りの南側の区域（バックホーフ地区）には19世紀末の典型的な労働者住宅（写真4）が、北側の区域（ヤーン学校地区）には、この街の市庁舎（写真5）を設計した建築家ブルンスによるネオゴシック様式の小学校（写真6）をはじめ、ユーゲント・シュティールの市民住宅（写真7）が数多く見られる。このように街は13世紀に完成した旧市街地と、これと駅とを結ぶ地区に発達した19世紀の街区によって形づくられたわけだが、そのわずかな面積の中に、中世から前世紀に至るあらゆる様式の建造物が建築の博覧会のごとく百花繚乱に咲き乱れているのである（写真8）。

ヤッターが下ろされ、もの悲しい街の風景をつくりあげている。途中立ち寄った小学校の校庭を走り廻る子供達の関連な声を聞きながら、それまで見学してきた街の光景を思う。いったいどこに彼らの家族が住んでいるのだろうかという疑問さえ沸いてくる。空家率はユーゲント・シュティールの建物群のあるヤーン学校地区で40%、労働者住宅が建ち並ぶバックホーフ地区の一部では90%にものぼるという。取り壊した空家の後の空地も同様に多い。

過疎化に伴う空家化は日本でも珍しくない。新しく進出する郊外の大規模店舗に顧客を奪われ、店じまいを強いられる地元商店街の厳しい状況にも大差がない。しかしここ東ドイツでは、こうした空家化を促進させたもうひとつの理由が存在する。旧東ドイツ時代の社会主義政策下における不動産の強制的な国家管理が、その後の所有に関する問題を生じさせた。統一直後には空家に対する西側からの入居希望もあったと聞くが、その手続きが数年にも及んで難航したことから、新しい住民は根付くことを諦めていったようである。需要がありながらも、残存する旧東ドイツの制度がこれを妨げてしまったのである。

発掘される「ことを待たず望む空家群」

ウィッテンベルゲはベルリンとハンブルクを結ぶ鉄道に駅をもつ街であるが、二つの大都市まで電車でわずか1時間程で行くことができる。日本であれば当然のごとくベッドタウンとして開発されて